

一般国道9号松江道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ

1990年3月

國道工事事務所
育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては、松江地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして松江道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら計画していますが、避けることの出来ない文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当松江道路においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会の御協力のもとに昭和50年度以降現在まで、約4億円の費用を投じ発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成元年度に実施した勝負遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められることへの御理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、御指導御協力頂いた島根県教育委員会並びに関係各位に対し深甚なる謝意を表するものであります。

平成2年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所長

菅原信二

序

島根県教育委員会では建設省中国地方建設局の委託を受けて、平成元年度一般国道9号松江道路建設予定地内の勝負遺跡の調査を実施しました。

松江道路の調査は、昭和50年度から昭和57年度にかけて現在使用されている二車線の道路部分の調査を行い、昭和61年度からは車線拡幅に伴う調査を実施しております。本年度の調査区は昭和55年度の隣接地にあたり、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡を検出しました。弥生時代後期の住居跡は5棟、古墳時代前期の住居跡1棟、同中期12棟であり、長期的に集落が続いていることが確認されました。当時の集落の様子を知る上で貴重な資料となることと思います。本報告が、広く埋蔵文化財に対する理解と関心を高めることに多少なりとも役立てば幸いです。

なお、調査にあたり御協力頂きました建設省松江国道工事事務所をはじめ関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成2年3月

島根県教育委員会

教育長 原 田 俊 夫

例 言

1. 本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成元年度に実施した一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査機報である。
2. 本年度は、勝負遺跡の発掘調査を実施し、発掘地は次のとおりである。

勝負遺跡 —— 島根県松江市東津田町字南外2142-6他

3. 調査組織は次のとおりである。

事務局 泉 恒雄（文化課課長），井原 謙（同課長補佐），勝部 昭（同課長補佐）
野村純一（文化係長），吉郷朋之（文化係主事），別所重一郎（島根県教育
文化財団嘱託）

調査員 広江耕史（文化課主事），藤井和久（同教諭兼主事），三島正司（同臨職）

調査指導者 山本 清（島根県文化財保護審議会委員），田中義昭（島根大学法文学部教
授），高橋 義（岡山県立博物館学芸課長），斎藤 努（国立歴史民俗博物
館情報資料研究部助手）

遺物整理 三島千富美，高角恭子，植田陽子，皆井国江，松山智弘

4. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

S D -溝，S I -竪穴式住居，S K -土壙，P -ピット

5. 本書で使用した方位は磁北を示す。

6. 本書の執筆，編集は調査員が討議してこれを行い文責は日次に表記した。

7. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行のものを使用し、「調査区配置図」は
建設省松江国道工事事務所作成のものをトレースして使用した。

8. 本遺跡出土遺物及び実測図，写真は島根県教育委員会で保管している。



勝負遺跡遠景



第1調査区全景



S I - 0 1



S I - 0 1 遗物出土状况

目 次

I 位置と環境	(藤井)	1
II 調査に至る経緯	(広江)	3
III 調査の経過	(広江)	3
IV 遺跡の概要		4
第Ⅰ調査区	(藤井)	4
第Ⅱ調査区	(三島)	15
V むすび	(広江)	19

I 位置と環境

勝負遺跡は、松江市市街地の東部、松江市東津田町字南外に所在し、佐草の丘陵部に源を発する馬橋川の沖積地およびその南側の丘陵部に立地している。この地区の隣接地には、出雲地方でも有数な穀倉地帯として名高い意宇平野が広がる。

このような地理的環境を持つ本遺跡周辺は、意宇平野を中心として、縄文・弥生時代から人々が生活を営んできたところである。

勝負遺跡の周辺では縄文時代の遺跡として晩期の粗良のある土器片などが出土している石台遺跡がある。

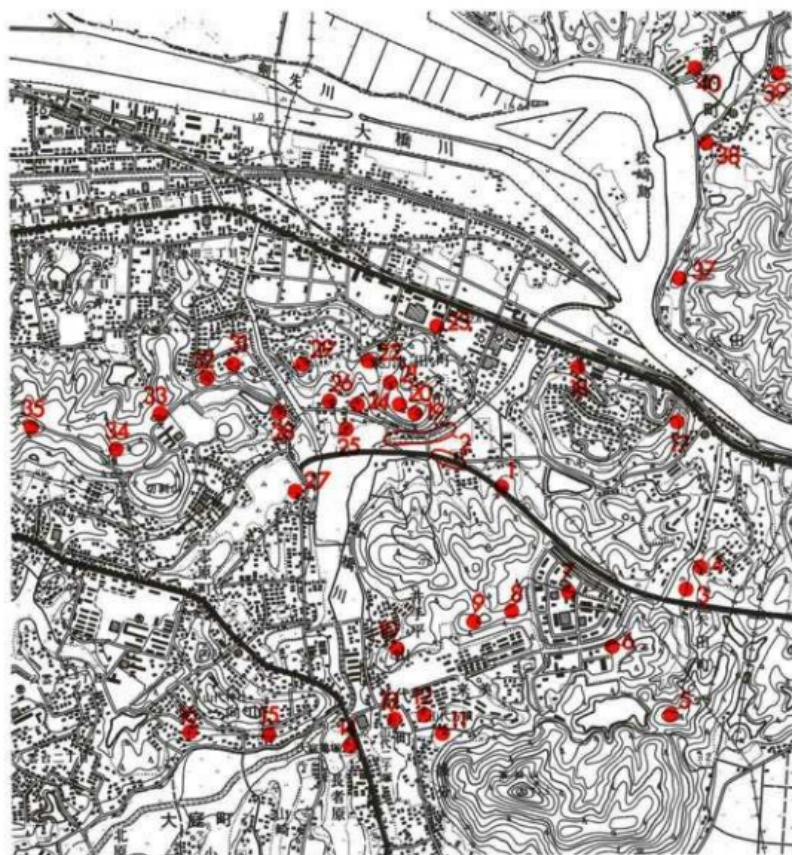
弥生時代に入ると、勝負遺跡の北方にあたる石台遺跡から遺物包含層・住居跡が検出されている。この他にも、平所遺跡で竪穴住居跡が検出され、古志原遺跡でも弥生時代と思われる土器が採集されている。墳墓では後期に属する四隅突出型の米美埴丘墓や間内越墳丘墓などが現れる。

古墳時代には、集落としては、晩期タルミⅣ遺跡、舟津田遺跡が知られている。中期に入ると大橋川流域を中心とする丘陵上に、出雲地方を代表する大型古墳が多く出現する。石屋古墳（方墳・40×39m）、井ノ奥4号墳（前方後円墳・全長約57.5m）、竹矢岩舟古墳（前方後方墳・全長50m）、手間古墳（前方後円墳、全長約70m）などが挙げられる。後期になると茶臼山山麓の山代二子塚（前方後方墳、全長92m）、勝負遺跡の北部の山頂に築造された高杉古墳群（1号墳 前方後方墳・全長26.5m、2号墳 方墳・11.5m）、また、西側丘陵地帯では、論田古墳群（方墳、横穴群）などがある。また、意宇平野の岡田山古墳（前方後方墳、全長24m、横穴式石室）、岩屋古墳、廻原古墳群（円墳）なども存在する。そして十三免横穴群、狐谷横穴群などの大規模な横穴群も、丘陵山腹に穿たれている。また、埴輪窯跡として知られている平所遺跡も、東部に位置する。

次の律令時代に入ると、出雲国府が意宇平野の南部中央の大草町に置かれ、国府城北東方の竹矢町には出雲国分寺や國分尼寺の両官寺が建立された。また、山代郷の北の新造院として来美盛寺等の私寺も建立されており、この地域が奈良・平安時代には出雲国の政治・文化の中心地であったと言えよう。

参考文献

- 『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ 島根県教育委員会 1983年
- 『石台遺跡－馬橋川河川改修に伴う発掘調査報告－』 島根県教育委員会 1986年
- 『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅲ（石台遺跡） 島根県教育委員会 1989年



第1図 勝負遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 勝負遺跡
2. 石台遺跡
3. 平所遺跡
4. 間内越墳丘墓
5. 週田古墳
6. 十王免横穴墓群
7. 来美墳丘墓
8. 来美廃寺
9. 来美遺跡
10. 井手平古墳群
11. 永久宅後古墳
12. 山代方墳
13. 山代二子塚
14. 大庭鶏塚
15. 向山東古墳
16. 向山西古墳
17. 石屋古墳
18. 東光台古墳
- 19・20. 高杉古墳群
21. 伝兵衛山古墳
22. 伝兵衛山古墓
23. 鹿日神社前遺跡
24. タルミⅠ遺跡
25. タルミⅡ遺跡
26. タルミⅣ遺跡
27. 古志原遺跡
28. 噴ヶ谷遺跡
29. 根屋古墳
31. 岡古墳群
32. 岡横穴群
33. 横田古墳群・横穴群
34. 室藤古墳群
35. 奥金見古墳群

II 調査に至る経緯

今回の勝負遺跡の調査は、昭和55～56年に行った新定道路部分の残り4車線の本道工部分について実施した。

一般国道9号松江道路は、6車線が計画されており、昭和57年に行われた鳥根県主要幹道道路として供用するために、昭和55・56年の2カ年にわたって計7遺跡（春日遺跡、夫敷遺跡、布田遺跡、中竹矢遺跡、才ノ岬遺跡、勝負遺跡、石台遺跡）の調査を行った。

その後、60年度に建設省から一般国道9号松江道路の残り4車線の本道工部分の調査依頼があり、協議の結果、61年度に春日遺跡から調査を行った。

本年度は、本道工部分の調査に入つてから4年目であり、松江道路ルート内の勝負遺跡の調査を行つた。

III 調査の経過

今年度の調査は、前回の調査結果に基づいて調査区を設定した。第Ⅰ・Ⅱ調査区は、低丘陵の尾根、斜面となっており、前回の調査で遺構、遺物を多く検出した部分である。第Ⅲ調査区は、丘陵の斜面が急峻なため、前回の調査では遺構を検出していない。

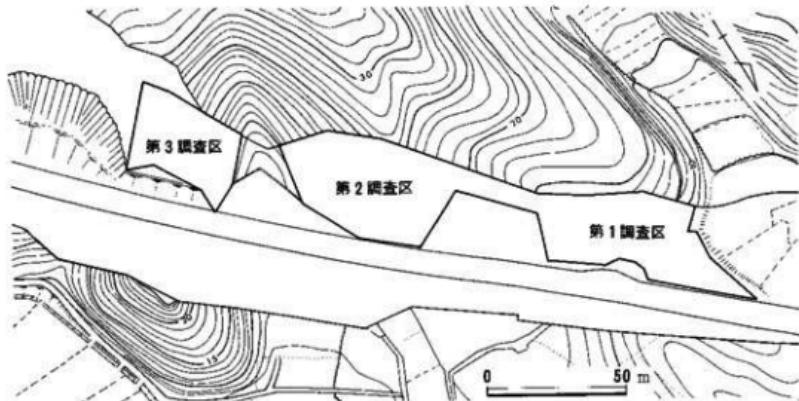
調査は、4月17日から開始し、第Ⅰ調査区の地形測量を行い、4月25日から調査を行つた。当初考えていたより、盛り土が厚く堆積しており6月22日から遺構の精査を行つた。その結果、第Ⅰ調査区東側の谷部においてピット多数を検出し、8月30日から遺構の実測を行つた。その後、このピット群の下層が包含層であることが判明し、9月11日から掘り下げていったところ堅穴住居跡を確認した。第Ⅰ調査区では合計10棟の堅穴住居跡を検出し、10月31日に全体写真を撮影し調査を終了した。

第Ⅱ調査区は、8月17日から表土掘削を行つた。北側の斜面は地山上に厚く黒色土が堆積している。この斜面において、11月16日堅穴住居跡を6棟検出した。12月15日に住居跡の実測を行い第Ⅱ調査区の調査を終了した。

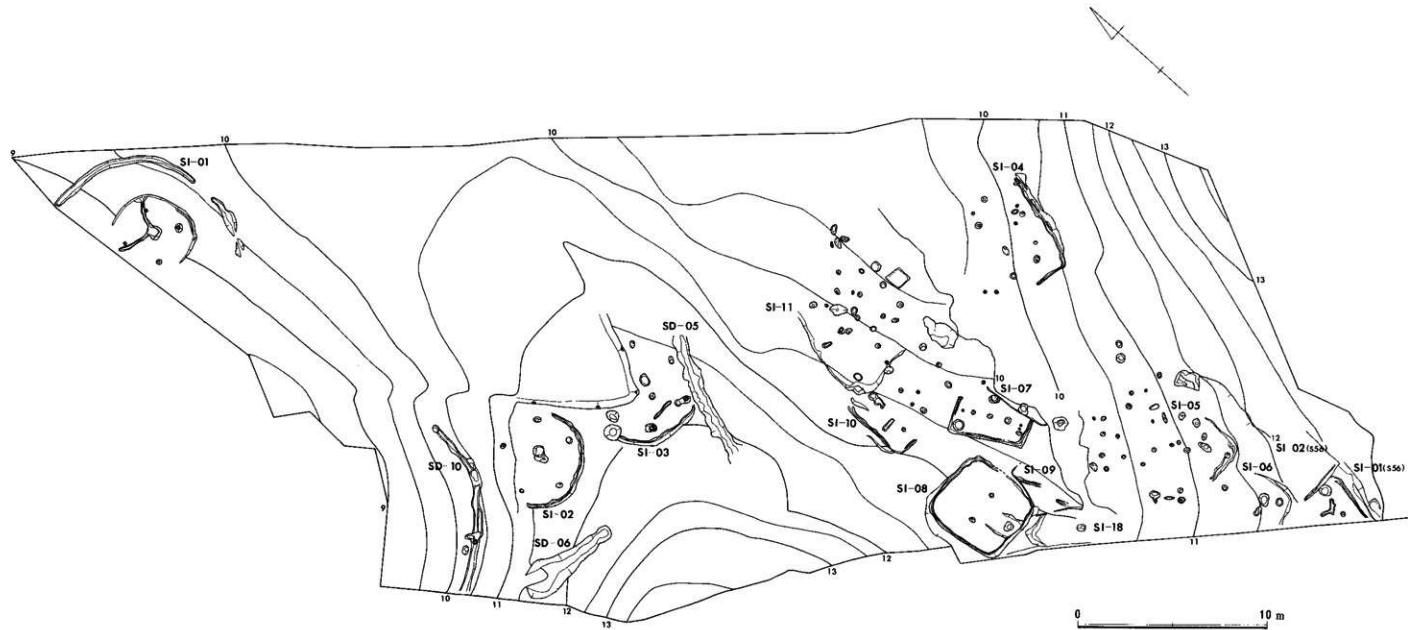
第Ⅲ調査区は10月30日から地形測量を行い、11月16日から表土掘削を行つた。北側の斜面は、かなりの急勾配であり表土の堆積は薄かった。第Ⅲ調査区の東側は尾根となっており、ピットを確認した。12月22日に実測を行い調査を終了した。

N 遺 跡 の 概 要

今回の調査では、第Ⅰ調査区、第Ⅱ調査区において弥生時代から古墳時代にかけての住居跡を検出し、第Ⅲ調査区においては古墳時代のピットを検出している。第Ⅰ調査区では、北側へ向けて深生する尾根上においてSI-01, 02, 03、谷部においてSI-04, 05, 06, 07, 08, 09, 10, 11, 18を検出している。SI-01～03周辺は後世の耕作によりかなり削平を受けているが、逆に谷部においては深いところで厚さ1.5mの包含層が堆積していた。溝(SD-01)は、表土から掘り込まれており、谷の奥が近世に堤として利用されており、それに併う水路と考えられた。耕作土下には黒色土が堆積しており、この土を除去したところ、ピット多数が検出された。ピット上に堆積した黒色土中からは、弥生土器、土師器、中世の土師質土器が含まれていた。第Ⅱ調査区においては、標高22.0mの尾根の北側斜面においてSI-12, 13, 14, 15, 16, 17を検出している。これらの住居跡はいずれも斜面に位置するため、斜面下部が流出している。調査区の北部において幅2.10m、深さ1.63mの溝が位置している。この溝の上部は堤の土手となっており、土手が版塗状に築き固められている。尾根の上部から南側の斜面にかけては遺構は検出していない。第Ⅲ調査区は、標高29.0mを測る尾根の北側斜面に位置する。この北側斜面はかなりの急斜面となっており、遺構は尾根上の緩斜面においてピットを検出している。このピットも柱穴等の明瞭なものではなく根の擾乱の可能性がある。



第2図 調査区配置図



第3図 第I調査区遺構位置図

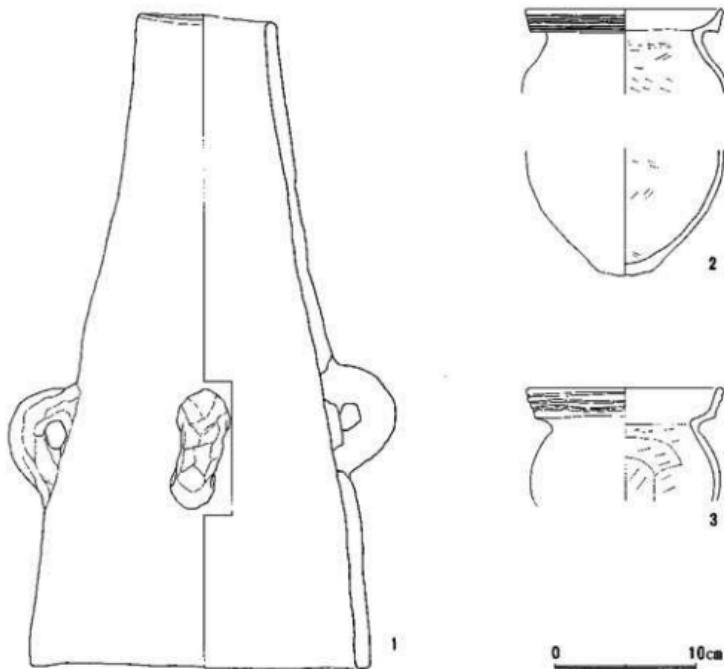
SI-01

第1調査区の西北端に位置する。

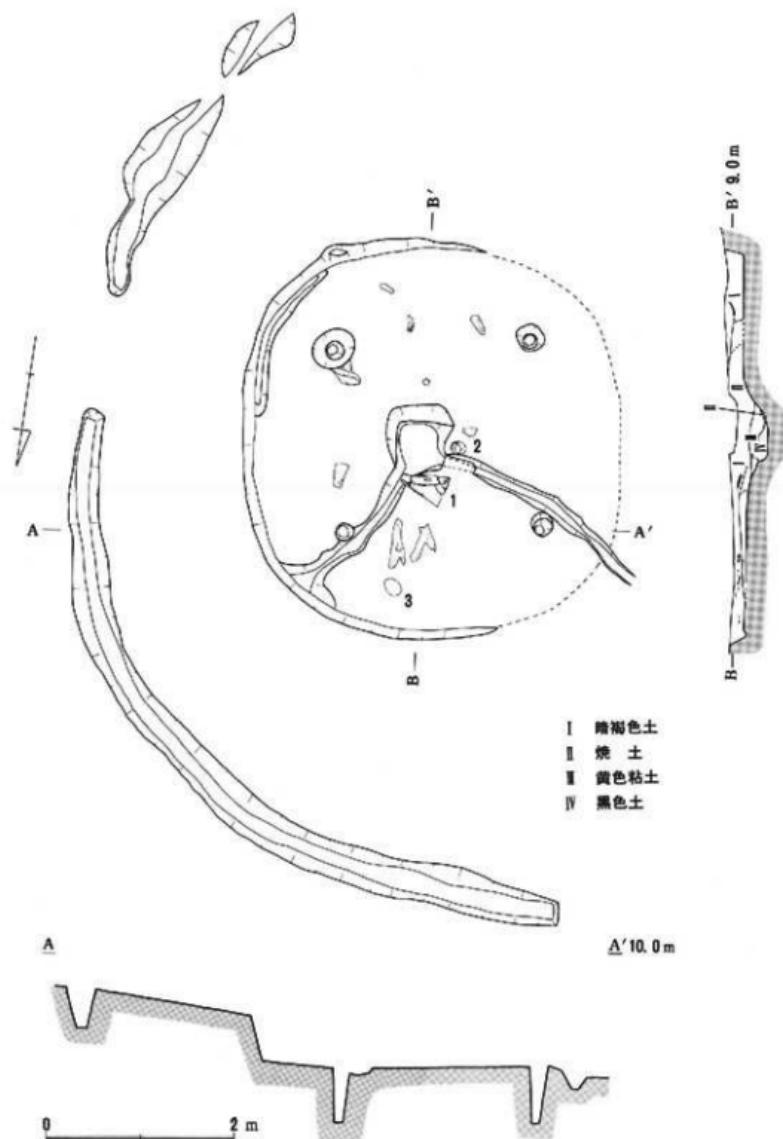
住居跡は、平面形が隅丸方形で、一辺4.3mを測る。住居跡の東側1.5~2mのところに幅約40cm、深さ約50cmの溝が巡っている。住居跡の東側で、溝の一部分が約1mに渡って途切れている。床面より、柱穴4と中央ピット1を検出した。柱穴間の間隔は、それぞれ2~2.2mである。中央ピットは、方形を呈し、大きさ70×80cm、深さ20cmのものである。この中央ピットに接続して北東の方向に幅20cm、長さ2m、南西の方向に幅20cm、長さ2.6mの溝が住居跡の壁へと続いている。

この住居跡には、床面上より住居の柱材等が焼化した状態になって多く出土している。床面中央部には、赤褐色の焼土が、1.6m×2.3mの範囲で、厚さ17cmで堆積している。

遺物は、弥生土器の甌1、甌2が出土している。甌は、中央ピットの北側、甌は、中央ピットの西側と、もう1つは、北側に1.2m離れた壁寄りから出土した。



第4図 SI-01 出土遺物実測図



第5図 S1-01 実測図

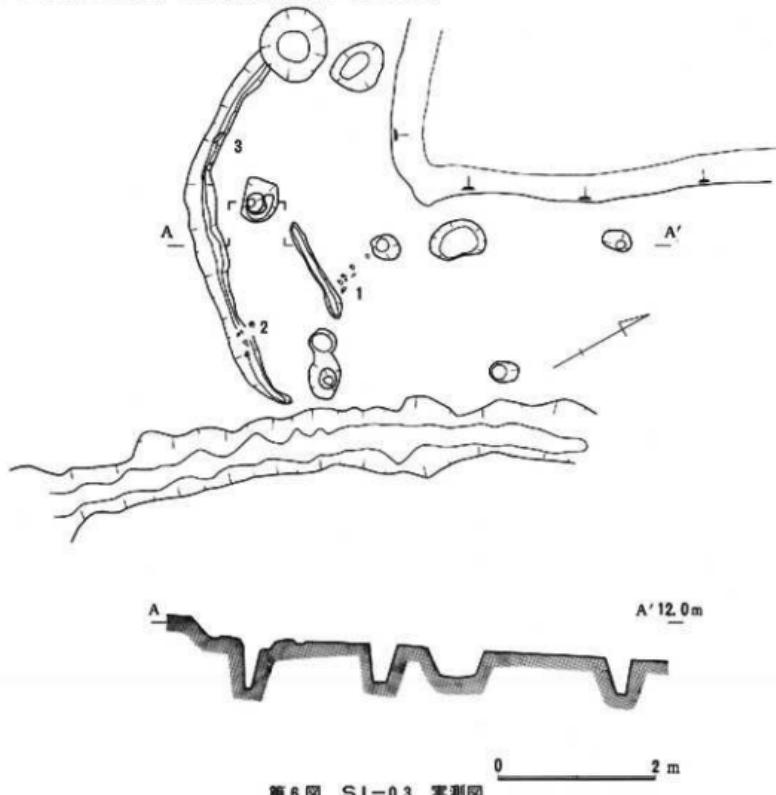
S I - 0 1出土遺物（第4図）

瓶形土器（第4図1）

1は瓶形土器とされるものであるが、用途を考えて上下を逆に作図したものである。口縁部は、径 10.0 cm、底径 24.2 cm、器高 46.7 cmを測り、底から上へ 11.0 cmの位置に把手が縦方向に着くものである。把手は体部に差し込み接合されるものであり、差し込みの穴は上方が大きく開けられている。把手は上部の方が厚く作られており、吊下げる時のためとも考えられる。内外面ともに細かい刷毛状工具を使用したナデ調整が行われている。外面の把手の位置にスヌ状の付着物がある。

瓶形土器（第4図2・3）

2・3とともに口縁部の外面に沈線を入れた後にナデしており、内面頸部以下ヘラケズリを施している。この土器の時期は、弥生時代後期中頃と考えられる。



第6図 SI-03 実測図

SI-03

第1調査区のほぼ中央の平坦面に位置する。黄褐色土の地山に掘り込まれており、南側の壁を一部残すのみである。住居の東側を溝（SD-04）によって切られている。

この住居跡の平面形は、復原すると六角形を呈していたと思われ、床面より主柱穴6、中央ピット1を検出している。北側の柱穴1個は、削平されており、本来は、周囲に6個、中央に1個の柱穴があったと思われる。柱穴の大きさは、約30×20cm～70×60cm、深さは、約50～60cmである。中央ピットは、長方形を呈し、大きさ50×60cm、深さ35cmのものである。また、中央ピットから南に約1.4m離れたところに東西に長さ約1.3m、幅15cm、深さ5～6cmの細長い溝が走っている。そして、南北の方向に幅約1m、深さ20cmの溝が走っている。

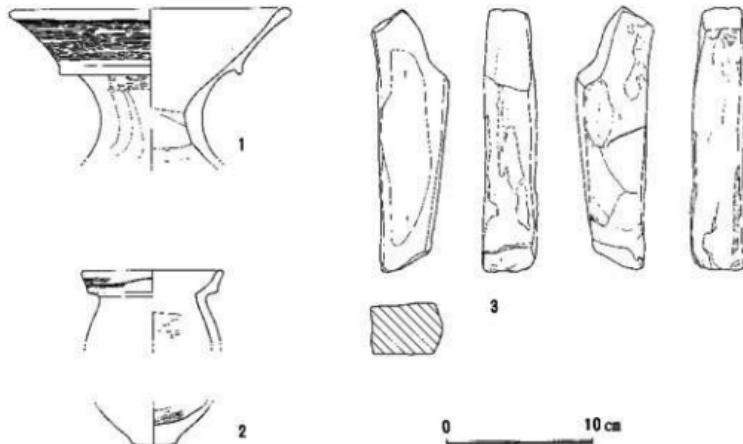
遺物は、中央ピットから、約1m南で器台が出土している。また、住居跡の南側の壁際で甕が出土している。

SI-03出土遺物（第7図）

器台形土器（第7図1）の受部から筒部にかけての破片であり、筒部のやや太いものである。受部の外面には15条の沈線を施した後、ヘラミガキにより一部を消している。

小形の甕（第7図2）は、口縁部外面に4条の沈線を施した後にナデ消している。底部はやや丸味を持つ平底である。器台形土器と甕形土器の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。

砥石（第7図3）は、側面の4面とも使用痕が残っており、その内一面が最も使用されており、かなり摩滅しており平端になっている。

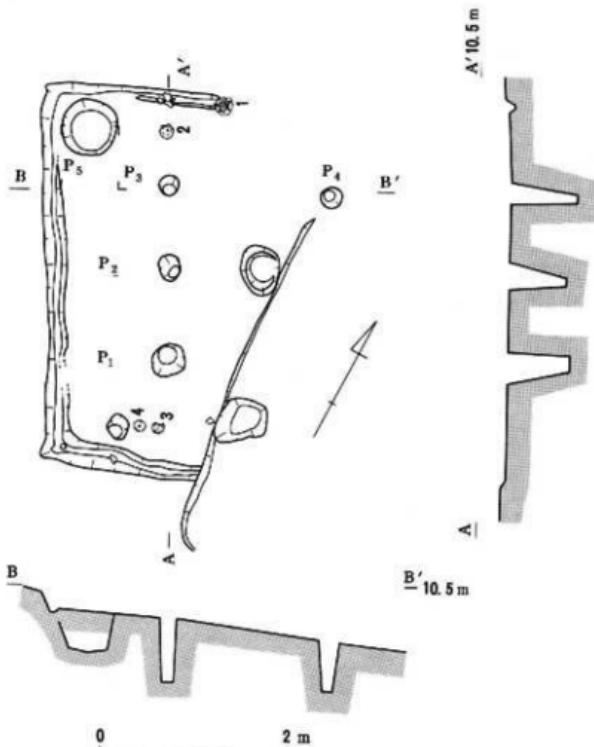


第7図 SI-03 出土遺物実測図

SI-07

第1調査区の東側の谷部に位置する。黄褐色土の地山に掘り込まれた、方形の住居跡であり、東側のコーナーは、SD-01と切り合い関係にあり検出不可能であった。両者は、SD-01（新）、SI-07（古）の新旧関係にある。覆土は暗褐色土が多く流入していた。住居の規模は一辺 4.2 m、深さ 20 cm を測る。

柱穴は、主柱穴が 4 本（P1～4）と、浅いビット 2、貯蔵穴 1（P5）がある。主柱穴は復原すると合計 6 と思われる。主柱穴間の間隔は、P1～P2 間、P2～P3 間はそれぞれ 90 cm、P3～P4 間は 1.7 m である。ビット上縁の径は 20～34 cm、深さ 55～70 cm を測る。ビットの覆土は暗褐色土である。北西の隅より円形の貯蔵穴を検出しており、上縁の径は 60 cm、深さ 40 cm を測る。中央部に浅いくぼみがあり、50×40 cm の範囲で焼けていた。住居跡の床面はほぼ平坦であり、貼り床は



第8図 SI-07 実測図

確認できなかった。

遺物は、土師器の壺2、高壺3、壺1が底面から出土している。

S I - 0 7 出土遺物（第9図）

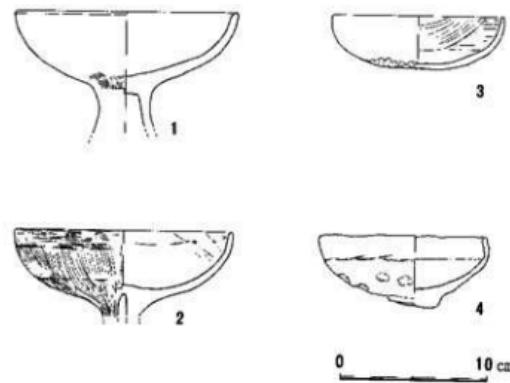
高壺形土器（第9図1、2）

高壺はともに壺部に丸味を有するものである。1は、外面にハケメ調整を施した後にナデ調整を行っており、内面もヨコナデにより仕上げている。2は、外面をハケメの後一部にナデを施しており、脚部との接合部分には指頭圧痕がみられる。

壺形土器（第9図3、4）

3は、口径12.0cm、器高3.6cmを測る。底部はヘラケズリを行っており、口縁内外面ともにヨコナデを施している。4は、手捏風の成形を行っており、器形がややひすんでいる。口径11.4cm、器高4.9cmを測る。

高壺、壺の時期は、古墳時代中期中頃のものと思われる。



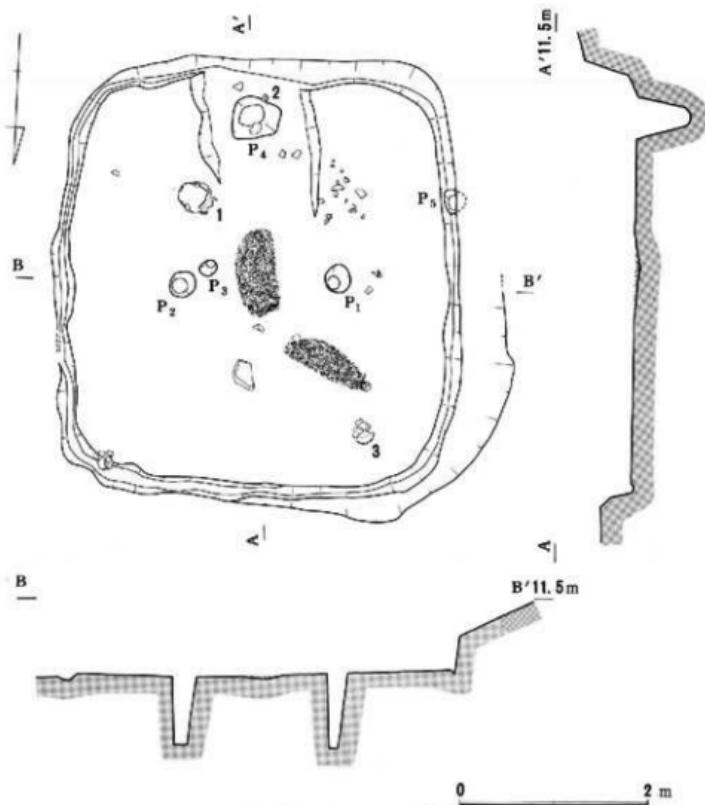
第9図 SI-07 出土遺物実測図

SI-08

第1調査区の南東部の緩斜面に位置する。黄褐色土の地山に掘り込まれた、隅丸方形の住居跡である。覆土は若干の炭化物を含む褐色土の上に、多量の炭化物を含む黒褐色土が流入している。住居の規模は $4.4\text{ m} \times 4.6\text{ m}$ 、深さ68cm（北側）である。

柱穴は、主柱穴が2本（P1～2）と浅いピット（P3），貯蔵穴（P4）がある。主柱穴間の間隔は、1.6mである。ピット上縁の径は26～30cm、深さ70～80cmを測る。ピットの覆土は暗褐色土である。

住居跡の床面は、北側部分に約20cmの厚さで貼り床が施してあった。また、両側でベッド状に高くなっている、その中央に貯蔵用の穴が作られている。床面の中央が、 $100 \times 40\text{ cm}$ の範囲と、100



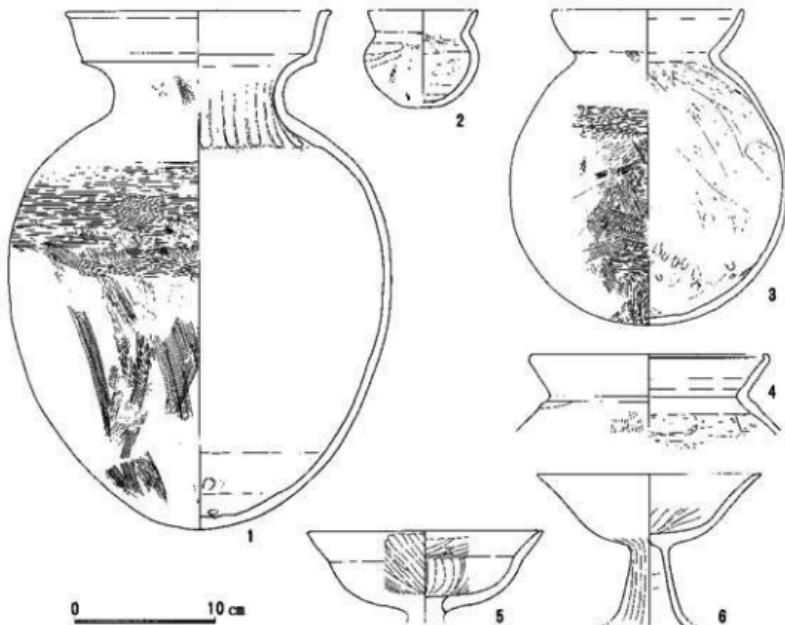
第10図 SI-08 実測図

×30cmの範囲の2ヶ所で多少くぼんでおり、全面に焼けている。その上に薄く灰層の堆積が認められた。

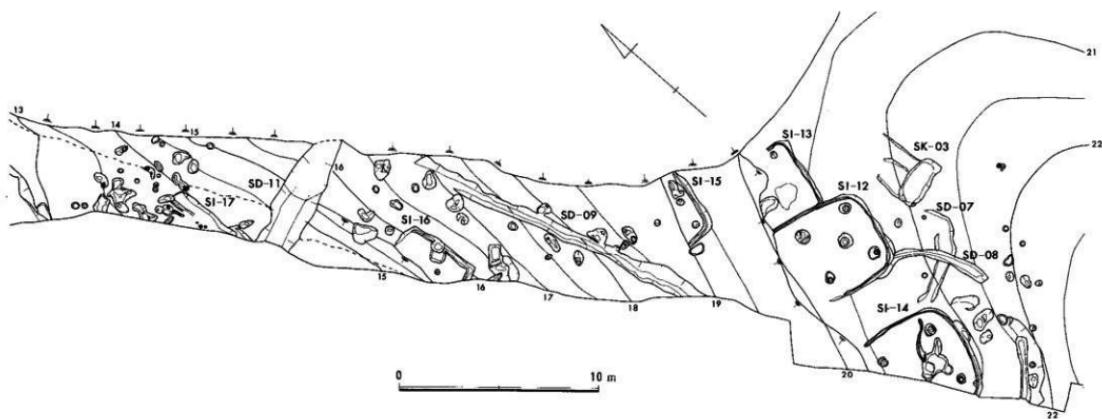
遺物は、床面から土師器の壺4、高环1、小形丸底壺1が出土している。

S1-08出土遺物(第11図1~6)

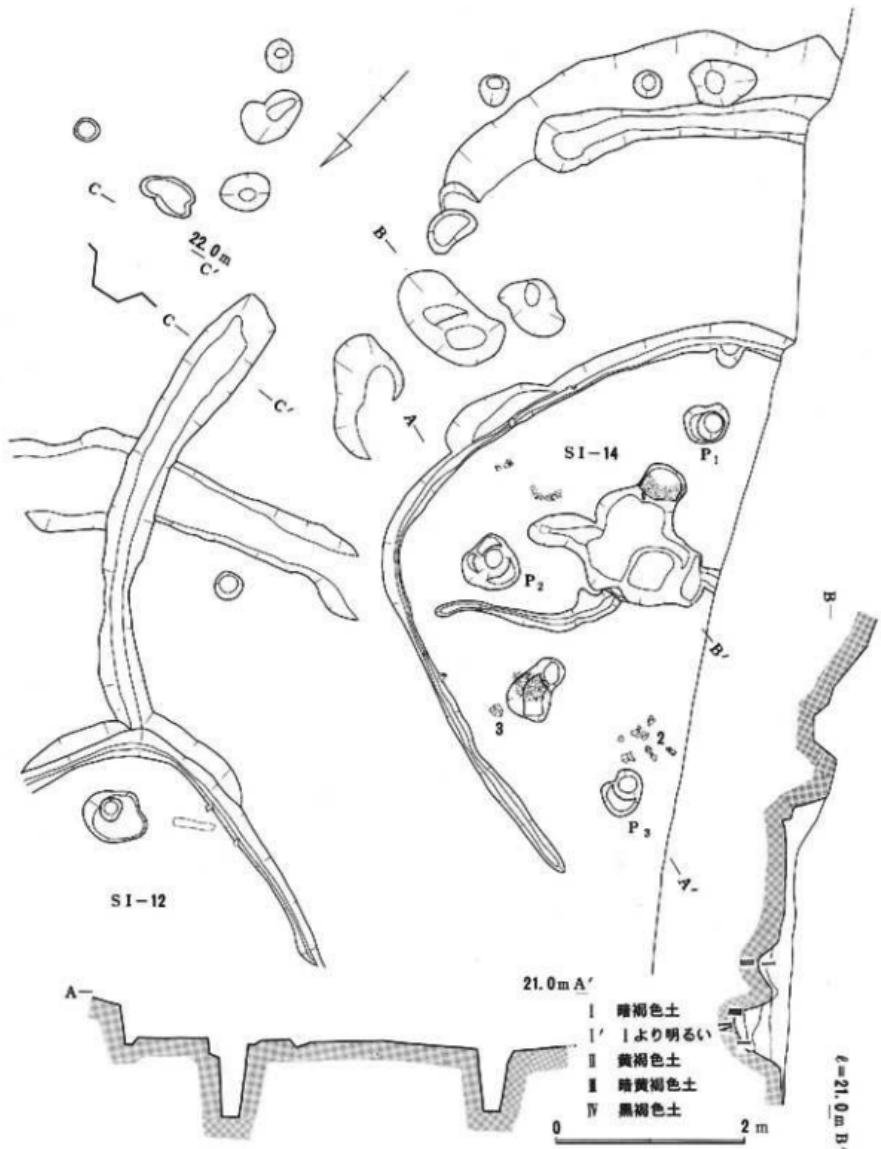
1は壺形土器であり、床面から出土している。口径19.0cm、器高36.9cmを測る。口縁部は上端が平坦で、下端の突出部はやや丸味を持っている。体部は肩が丸く、全体に縦長で、底部は丸底である。2は小形丸底壺で、口径7.8cm、器高7.0cmを測る。口縁部の立ち上りは短く、外面はナデ調整により仕上げている。3は単純口縁の壺であり、口径13.6cm、器高22.5cmを測る。体部は肩が張らず丸味を有する。体部外面はハケメ、内面頸部以下ヘラケズリ、底部内面に指頭圧痕を残す。4は、口縁端部の内側が肥厚しており布留式の壺と思われる。体部外面は粗いハケメの後をナデしている。5・6は高环で、体部が外反しながら立ち上るものである。これらの土器は、1の壺形土器が小谷式の範疇に含まれるが、やや後出的な要素があり、また、3の壺が単純口縁を有すことから古墳時代前中期と思われる。



第11図 S1-08 出土遺物実測図



第12図 第II調査区、全面図



第13図 SI-14 実測図

SI-14

第II調査区東側斜面の山頂付近の緩斜面に位置する。黄褐色土の地山に掘り込まれた隅丸方形の住居跡であり、西側のコーナーは調査区外の為、検出不可能であった。覆土は、大部分に暗褐色土が多く流入している。住居の規模は一辺 5.0 m、深さ 40cm（東側）を測る。

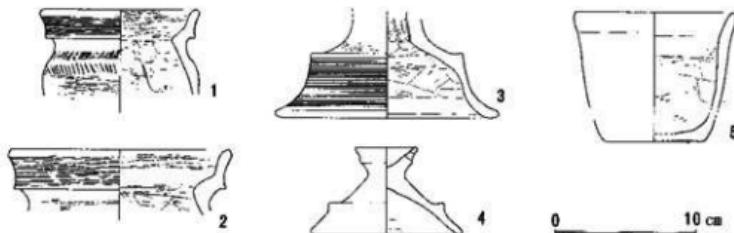
柱穴は、主柱穴が確認できたもので 3 本（P 1～3），中央ピットがある。主柱穴間の間隔は、それぞれ 2.9 m である。ピット上縁の径は 30～60cm、深さ 62～80cm を測る。ピットの覆土は暗褐色土である。中央ピットは、平面形が不整形を呈している。上縁の長さ 1.34 m、幅 0.94 m、深さ 50 cm を測る。ピットの上部には暗褐色土、下部には黒褐色土（炭と灰の混入土）が入っている。

住居跡の床面はほぼ平坦であり、貼り床は確認できなかった。中央ピットの東隅に 45×20cm の、また北側に 40×40cm の焼土痕が確認された。後者の下からは上縁部の径 30～50cm、深さ 10～20cm のピットが検出された。中央ピットの北側から住居の東隅に向かって長さ 2 m、幅 20cm、深さ 4～8 cm の溝が掘られている。また、住居の東側斜面に住居より約 2.1 m の距離で、幅 70cm、深さ 30cm の溝（SD-08）が巡っている。この溝は住居の真東側で 3.3 m にわたり途切れしており、出入口の部分とも思われる。床面の西側に径 14cm の円形の朱の痕跡が認められた。

遺物は、床面より弥生土器の甕 3、器台 3、石器 1 が出土している。

SI-14出土遺物（第13図）

1・2 は甕である。1 は口径 11.4 cm を測り、口縁外面に 9 条の沈線を入れ、内面はヘラミガキを施している。体部の外面には貝殻による刺突文を 2 段に入れている。2 は、口径 16.0 cm を測り、口縁外面に 8 条の沈線を施し、内面は口縁から頸部にかけてヘラミガキを施している。3 は、器台の脚部である。脚部の径は 16.0 cm を測る。外面には 19 条の沈線を施しており、外面に赤色顔料を塗付している。4 は、蓋形土器であり、内外面ともナデ調整を施している。上部に 2 個の孔があけられている。5 は、掩形土器とも呼ぶべきものであり、底部は平底で口縁へ向け直線的に立ち上る。これらの土器の時期は弥生時代後期後半と考えられる。



第14図 SI-14 出土遺物実測図

V む す び

今回調査を行った勝負遺跡では、I, II区の丘陵斜面において弥生時代の住居跡、溝、古墳時代の住居跡、溝、土壙、時期不明のピット群を検出している。

I, II区の各遺構は、以下の時期である。

○住居跡

弥生時代後期中頃	SI-01
後期後半	SI-12, 14, 02, 03,
古墳時代前期	SI-08
中期	SI-04, 05, 06, 07, 09, 10, 11, 13, 15, 16, 17, 18

○溝

弥生時代中期後葉	SD-09
----------	-------

○土壙

古墳時代後期	SK-03
--------	-------

住居跡のプランは、SI-01, 12, 14 が隅丸方形、これに続く時期として SI-02 が五角形、03 が六角形と特異なプランを呈している。古墳時代に入り、前期の SI-08 が隅丸方形で中期になると方形プランへと変化するようである。また、弥生時代の住居跡は中央ピットがあるが、古墳時代になると、實際に土壙が位置し、床の中央が焼けて凹んでいる。SI-01 は中央ピットとそれに続く溝が検出されている。この溝は、北側から中央ピット、西側の溝へと傾斜し、西側の溝の端は住居外となっている。中央ピットの底には炭と灰が堆積し、上部には地山と同様の土が堆積していた。中央ピットが炉等の火を使う施設であったようで、住居が焼失した際にもこの上に厚く焼土が堆積していた。このピットに接するように転形土器が出土している。この歴は、最も古い段階のもので同様のものは、鳥取県会見町天王原遺跡で 1 例出土するのみである。使用方法は、従来からいわれる瓶としてと、炉の上部につるし煙突としての用途などが考えられる。

勝負遺跡は隣接する石台遺跡の調査結果と併せて考えると、石台遺跡では住居が弥生時代中期後葉から後期初頭まで営まれ、その後は勝負において弥生時代後期中頃から古墳時代中期まで営まれたと考えることができる。両者は、集落を構成する一つの単位と考えることも可能ではないかと思われる。勝負遺跡の I, II区の両側にも住居跡の範囲が広がるものと思われる。県内においては、これだけ長期的な集落の継続が確認された例は少なく、今後の集落研究の基礎資料となるものと思われる。

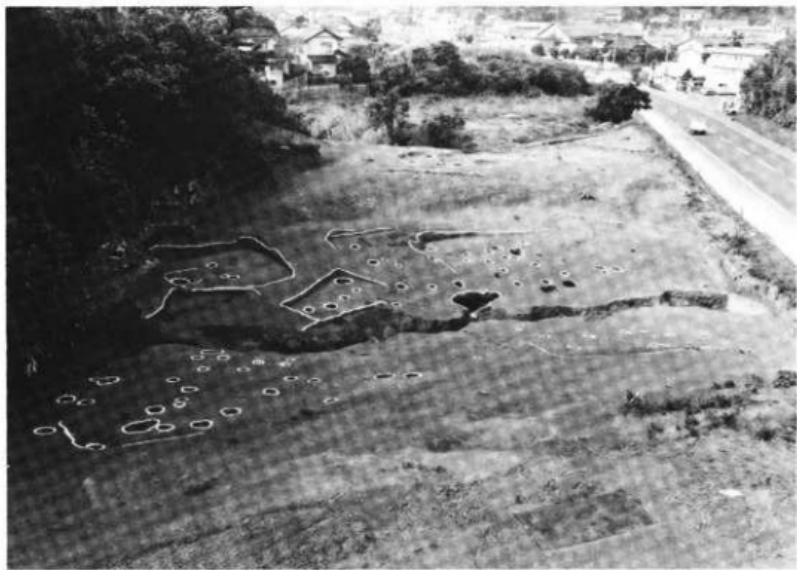


勝負遺跡遠景（北東より）



第1調査区上層遺構（西より）

図版 2



1区 全景(南東より)



SI-01 燃土検出状況(北西より)



SI-01 遺物出土状況

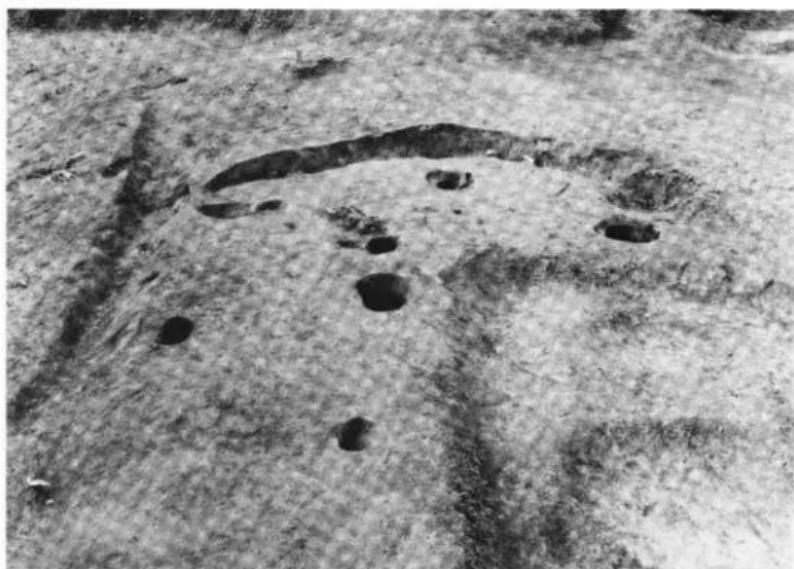


SI-01(北西より)

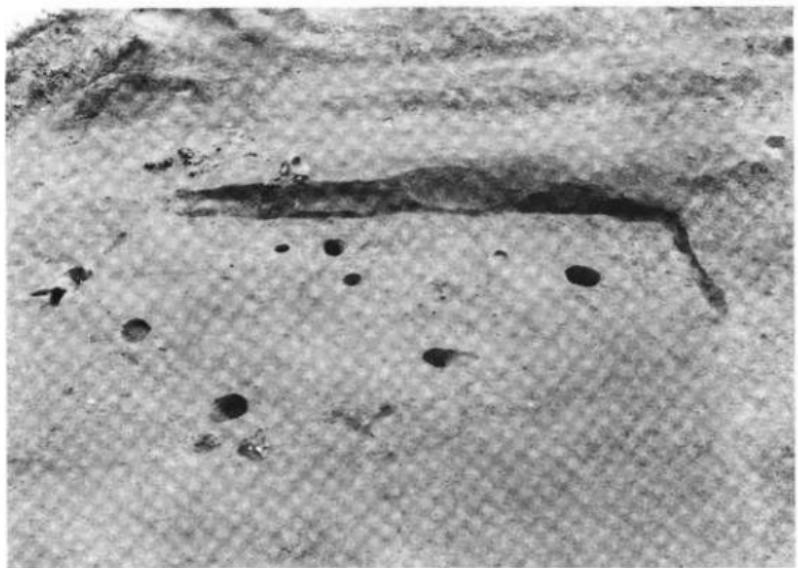
図版 4



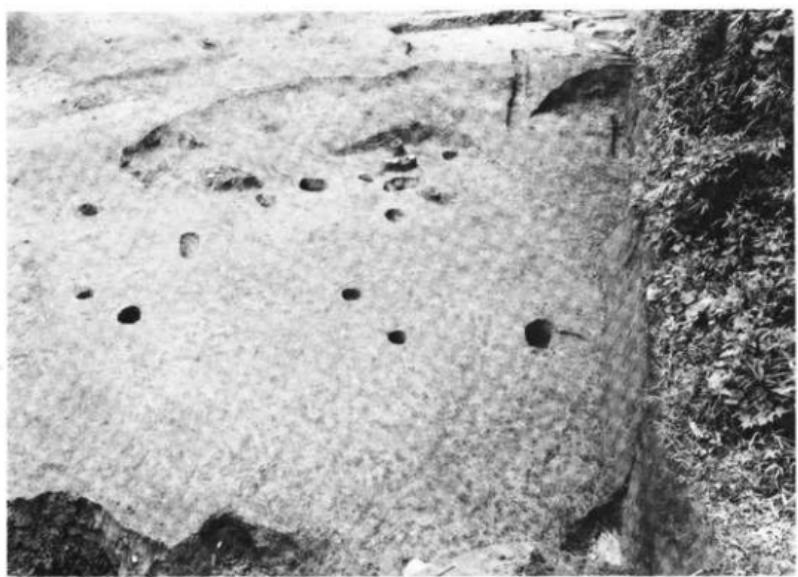
SI-02(北東より)



SI-03(北東より)

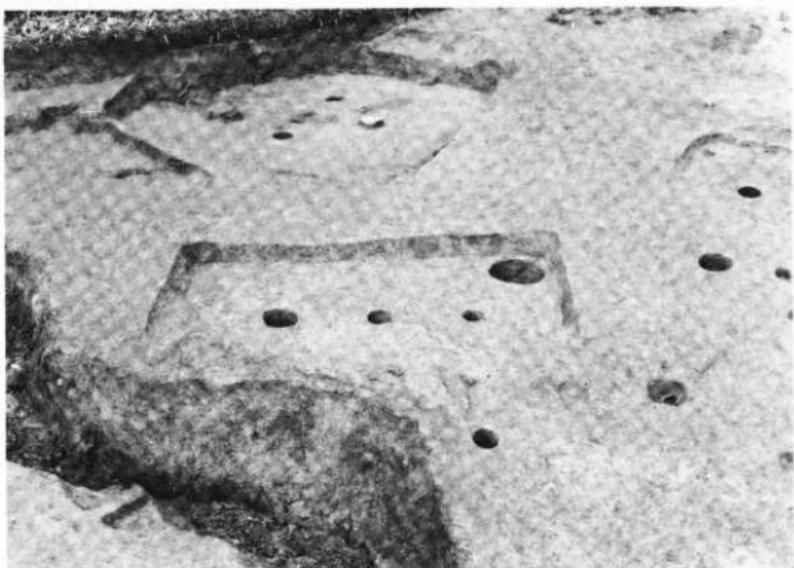


SI-04(北西より)

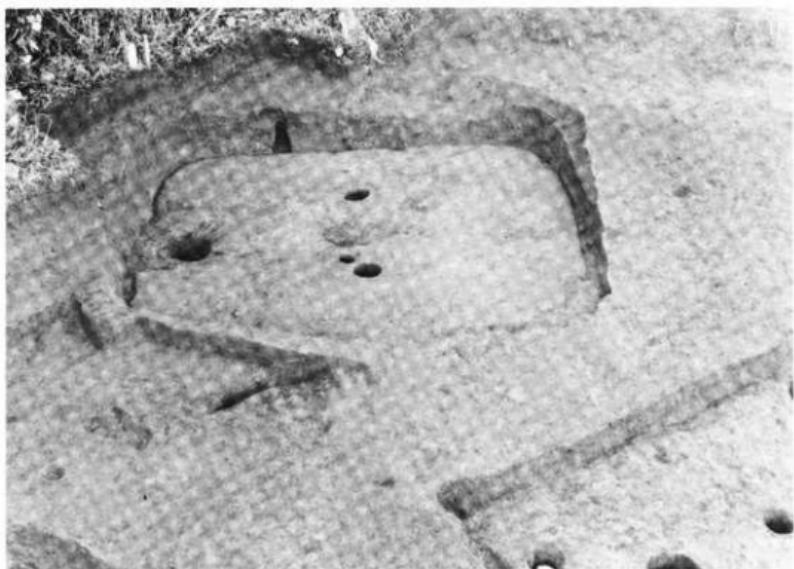


SI-05, 06(北より)

図版 6



SI-07, 08 [奥] (南東より)



SI-08 (南東より)

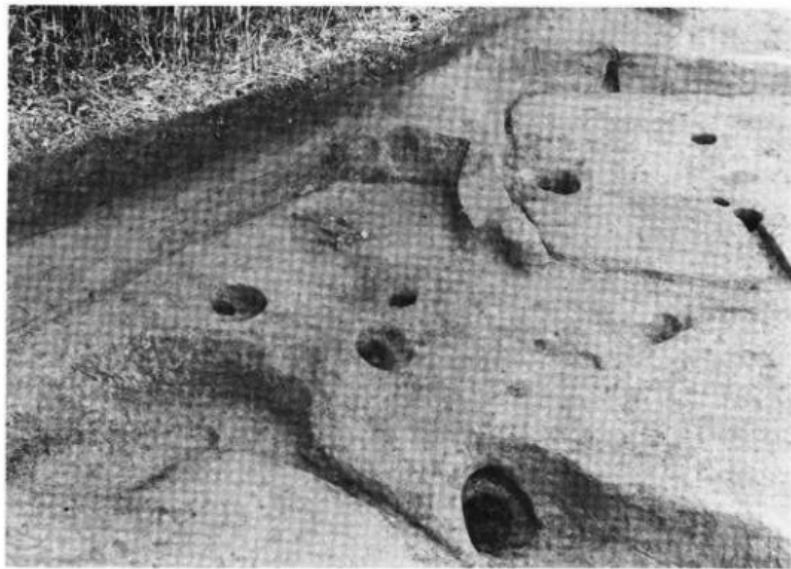


SI-08 (北東より)

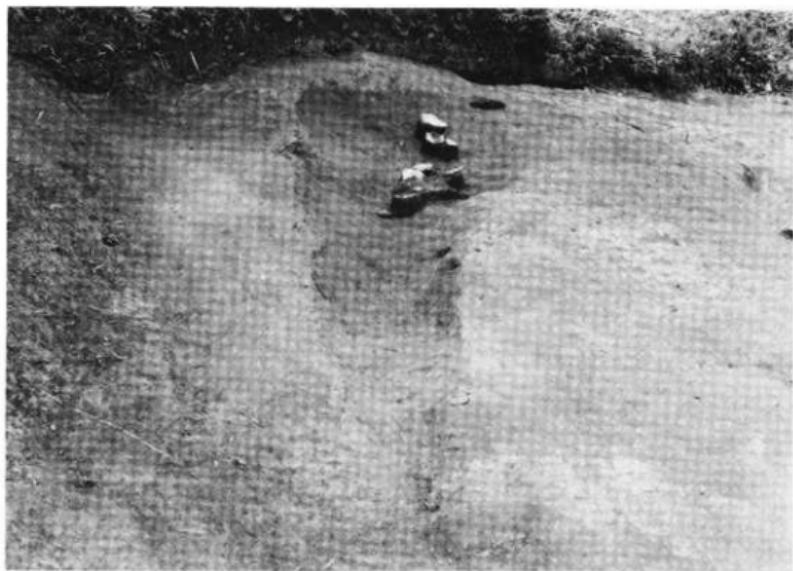


SI-09, 10 (南東より)

図版 8



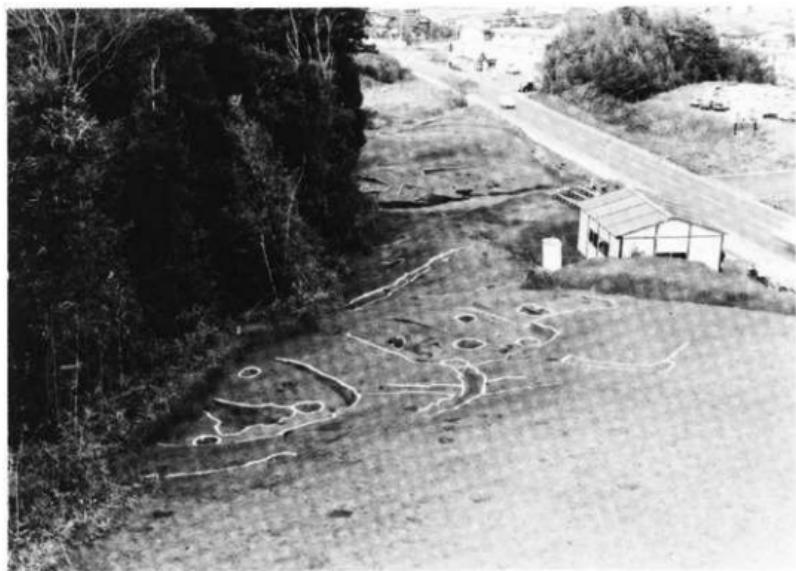
SI-18 (南東より)



SD-06 (南東より)

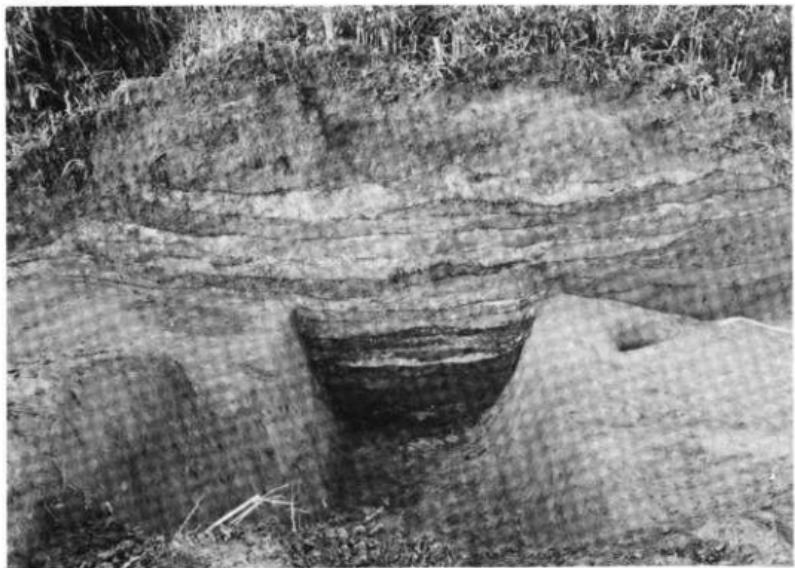


SD-09(北西より)

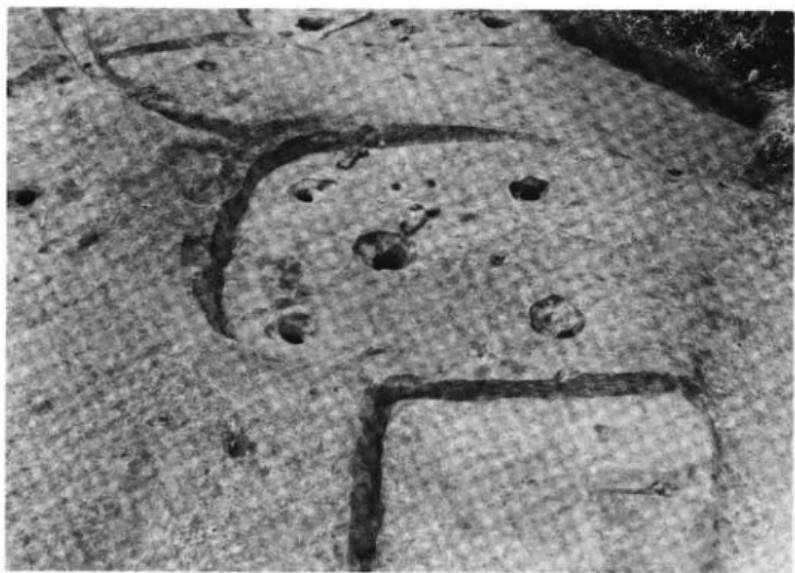


II区 全景(南より)

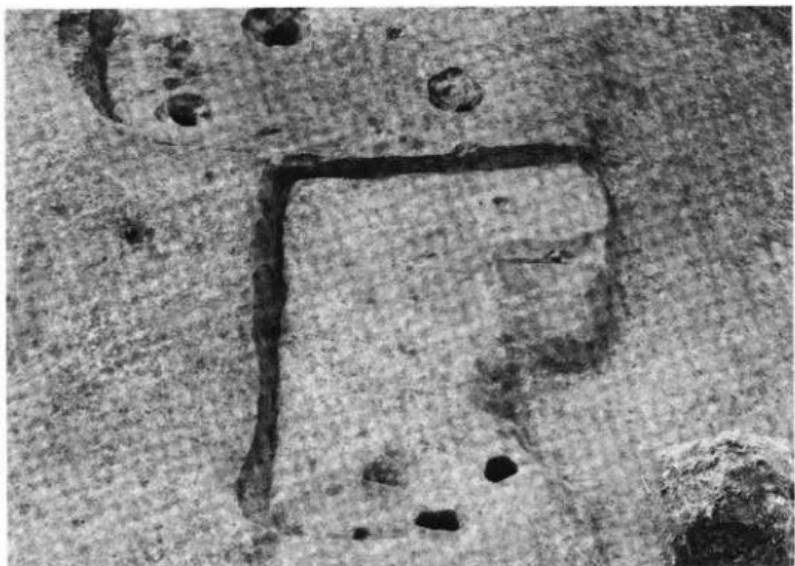
図版10



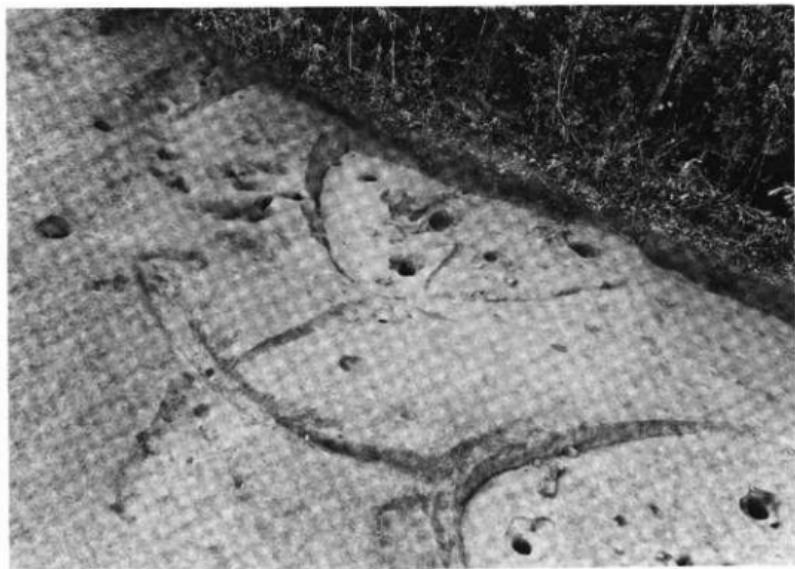
SD-11(東より)



SI-12(北東より)



SI-13(北東より)



SI-14(北東より)

図版12



SI-15(東より)



SI-16(北より)

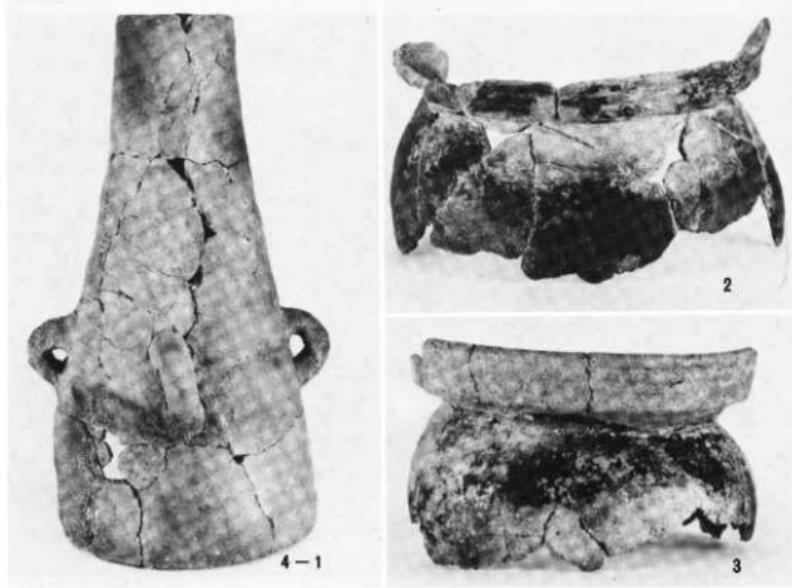


SI-17(北より)

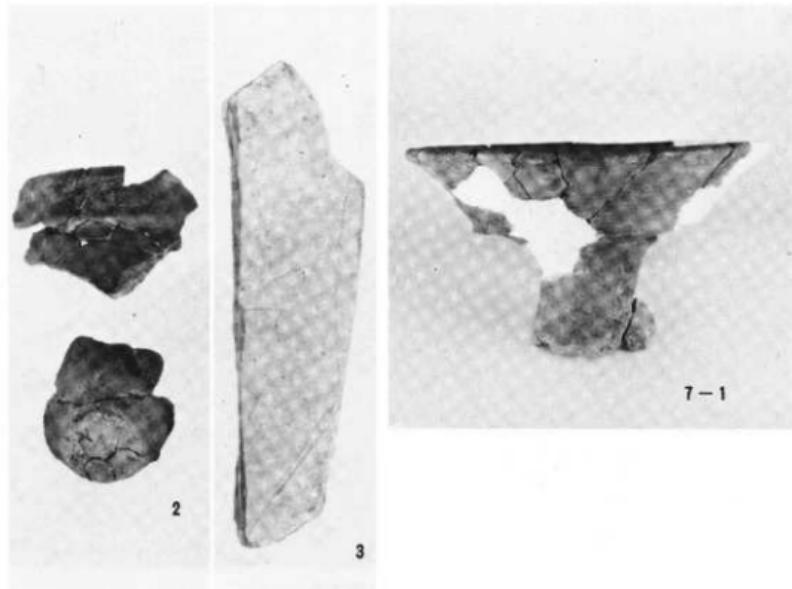


II区 全景より(南より)

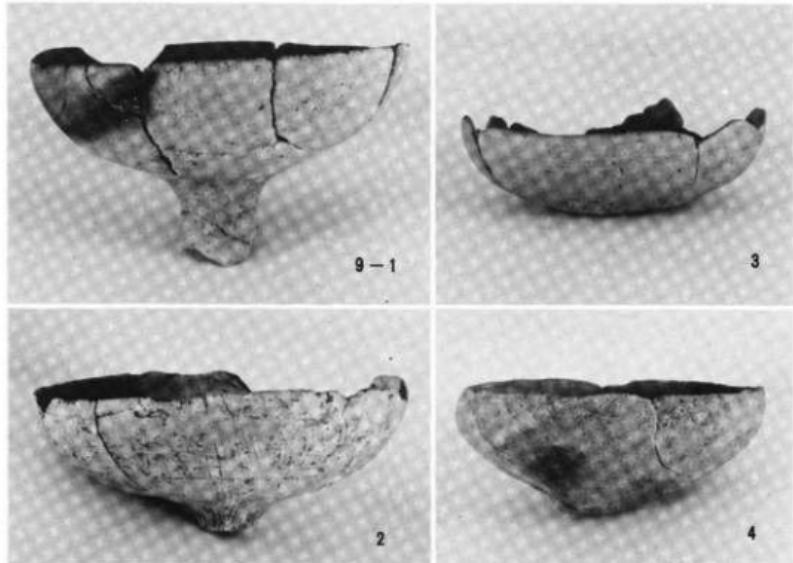
圖版14



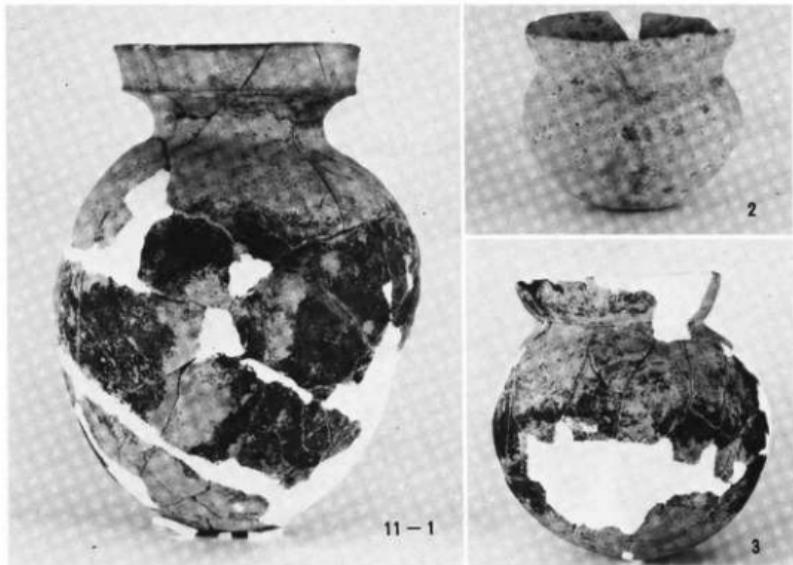
S I - 0 1 出土遺物



S I - 0 3 出土遺物

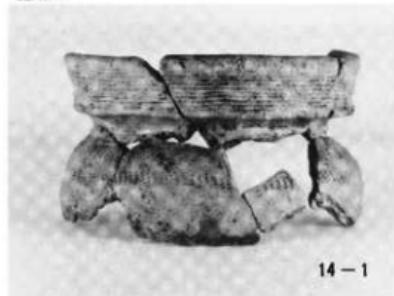


S I - 0 7 出土遺物



S I - 0 8 出土遺物

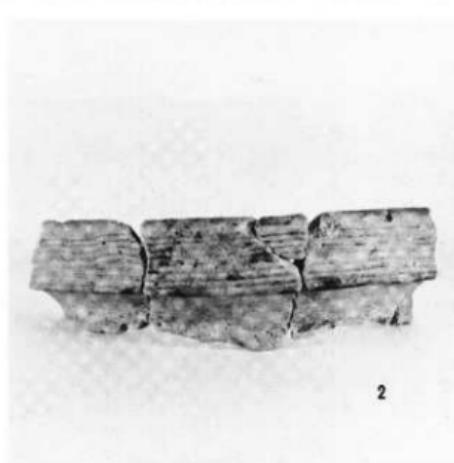
圖版16



14-1



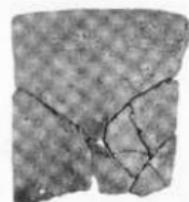
3



2



4



5

平成2年3月発行

一般国道9号松江道路建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書 IX
(勝負遺跡)

編集・発行 烏根県教育委員会
松江市殿町1番地

印刷・製本 (有)黒潮社
松江市向島町182-3